

戦時中の体験を聞く会

平成 26 年 8 月 16 日 (土)

8 月 16 日 (土)、当館講堂にて戦時中の体験を聞く会を開催しました。今年は「蝉が鳴かなかった 8 月～長崎での被爆体験」と題して、長崎での被爆体験をお話しいただきました。147 名の参加があり、参加者は、語り手の辛い被爆体験を熱心にうかがいました。

語り手 くぼやま 久保山 よしのり 榮典 さん (八潮市) 「蝉が鳴かなかった 8 月～長崎での被爆体験」



【プロフィール】

昭和 12 (1937) 年、長崎市浜口町 (爆心地より 150m 地点) にて 3 人兄弟の長男として生まれる。昭和 20 (1945) 年 8 月 9 日、原子爆弾被爆。当時 8 歳。父親は即死、母子 4 人は、爆心地より 2 km に避難中だったため助かる。

8 月 9 日はとても暑い日でした。午前 11 時 2 分、空襲警報解除のサイレンが鳴り、住まいの床下に掘ってある防空壕から出てきたすぐ後でした。飛行機が急上昇する爆音が響き、同時に周囲の空間が真黄色になりました。その瞬間本能的に異変を感じ、再び防空壕に飛び込んだのと同時に、ものすごい勢いの熱風がふき、家は潰れ、身動きもできないように家財道具が倒壊散乱しました。しばらくして安全な所に避難するために戸外に出た瞬間、我が目を疑いました。いつの間にか周囲が朱一色で、太陽も真っ赤に染まり、この世の終わりが来たのかと唖然としました。そして、次の瞬間、地球全体が爆発するのではないかと身が凍る思いでゾッとして、しばらく震えが止まらず、血の気が引いたのを覚えています。

避難した裏山の頂上から見た長崎の市街地は、赤い絵の具をぶちまけたような火の海でした。性別も、人種も、そして前後さえ見分けのつかない幽霊のような人間が、山を越えてどんどん上ってくるのを目の当たりにしました。

8 月 13 日、やっとの思いで父を見つけ出すも、遺体はやけどで 3 倍に膨れ上がっていました。燃えカスの木片をかき集め火葬するも、涙はありませんでした。その場の雰囲気と状況がそうさせたのだと思います。

「よい戦争と悪い平和はない」

被爆者が、日本のみならず地球に住む人たちに、反核・反戦争を訴え続ける必要があります。

